

be to 不定詞の意味誘導公式を導入した授業改善への提案

赤羽 佑太* 上條 智緩**

はじめに—問題提起

毎年生徒が理解に苦しむ箇所には傾向があり、とりわけ前置詞の to と動詞の原形によって成り立っている準動詞の「to 不定詞」は、形が一定であるにも関わらず、文中では①名詞的用法②形容詞的用法③副詞的用法と 3つの用法のいずれかとして機能し、用法が複数あることから、中学校・高等学校の生徒が苦戦する箇所である¹⁾。

「to 不定詞」を用いた表現は数多くあるが、高等学校の課程で登場する「be 動詞 + to 不定詞」の表現（以下 be to 不定詞）に関しては、前述した to 不定詞の 3つの用法を更に上回る多くの意味を有している。特筆すべきは、この be to 不定詞の有する意味が、教科書や学習参考書によって異なっており、統一された意味が定まっていないという点である。be to 不定詞を扱う文法書や学習参考書²⁾によって意味が異なる以上、当然英語の授業内におけるこの be to 不定詞の扱いも異なってくる。

まずこの be to 不定詞の意味を概観するために、文法書の中でも、この be to 不定詞を最も多くのカテゴリで例文とともに分類しているものを取り上げる。

(1a) 「予定」 The next meeting is to take place in Hong Kong.

(次の会合は香港で開催されることになっている。)

(1b) 「義務・命令」 You are to show your student card at the entrance.

(入り口で学生証を見せなければなりません。)

(1c) 「可能」 Not a sound was to be heard.

(物音ひとつ聞こえなかった。)

(1d) 「運命」 He was never to return to his hometown.

(彼は二度と故郷に帰ることはなかった。)

(1e) 「意図」 If you are to pass the exam, you'd better study hard.

(その試験に受かりたいのなら、必死で勉強しなさい。)

(奥 et al 2009 : 192-193)

と意味が与えられており、これらすべてがコンテキストに依存するとされている。

* 信州大学人文科学研究科修士課程 2年

** 信州大学人文科学研究科修士課程 2年

そこで、本論の目的は、第一にこの **be to** 不定詞の意味を解明することに焦点を当てる。**be to** 不定詞の意味用法はコンテキストによって5種類のうちのいずれかとなるのではなく、基本的意味は取り決めであり、他の意味がこの取り決めに由来していることをデータをもとに示す。第二の目的として、この取り決めを基本的意味に据えた指導の手立てを考案し、この指導の手立てが教育的効果をどれだけ生むのかを示す。

1. 文法書における **be to** 不定詞

始めに、現代の英文法書において **be to** 不定詞の意味がそれぞれどのように扱われているのかを比較する。

- (2) 『総合英語 Forest』(以下 奥 et al (2009))
 - ① 予定②義務・命令③可能+「運命」、「意図」
- (3) 『英文法詳解』(以下 杉山 (1998))
 - ① 予定・運命②義務・命令③可能+if節内のみ「目的」
- (4) 『INSPIRE 総合英語』(以下 萩野 (2004))
 - 「すでに決められていること」より、
 - ① 予定②義務・必然③運命④可能
- (5) Quirk et al (1985)
 - ① compulsion② plan③ destiny
- (6) 『現代英文法講義』(以下 安藤 (2005))
 - ① 取り決め、手筈② 一方的な取り決め③ 運命(神意による一方的な取り決め)
 - ④ 不可能⑤ 必要条件

上記5つの文法書を比較すると、全てに共通する意味は「運命」のみである。前章でも掲げた本発表の目的でもある効果的な指導の手立てを提案するためにも、**be to** 不定詞の基本的意味と、その意味からどのような過程を経てその他の意味に派生するかを示す必要がある。

2. 先行研究

(1) 橋本(2006)による **be to** 不定詞の意味

橋本(2006)では、**be to** 不定詞が **be** 動詞と方向を表す前置詞 **to** の組み合わせであることに着目し、その基本的意味について言及している。(橋本 2006 : 64) ここでは **be to** 不定詞の意味を

(7)「to 以下の方向にある(be)」

(橋本 2006:64)

と定めている。

従って、例えば

(8) The president is to visit London next week.

(ibid:64)

の場合、*The president* が *visit London next week.*に向かっている状態にあり、

(9) You are to do your homework before watching TV.

(ibid:64)

の場合は、*You* が *do your homework before watching TV*に向かっている状態であると説明が成されている。

(7)の中心的意味をもとに他の意味を説明する方法は筆者の目指す指導の手立てと一致する一方で、橋本(2006)ではこの(7)で全ての意味を理解できる(ibid:64-65)と言及しながら、その説明と検証は上記の2つの意味のみに留まっており、完全とは言い切れない。また(1c)と(1d)の意味は、この橋本(2006)の掲げる基本的意味ではその意味の差異までを説明することはできない。

(2) 安藤(2005)による be to 不定詞の意味

前項で挙げた安藤(2005)では、be to 不定詞の基本的意味を取り決めとし、この基本的意味をもとに、他の文法書では義務・命令に当たる意味を②一方的な取り決めとして説明し、また③運命の意味を「神意による一方的な取り決め」として補足説明を行っている(安藤 2005: 108)。しかし、この安藤(2005)でも、取り決めという基本的意味から他の意味を説明しようとする試みがあるものの、(6)に挙げたように、④不可能⑤必要条件については基本的意味の取り決めでは説明がされていない。

3. be to 不定詞の意味誘導公式

そこで筆者は、この安藤(2005)にて定義された be to 不定詞の基本的意味である取り決めをもとに、be to 不定詞の意味誘導公式を考案した。これは、本研究の第二の目的である、効果的な指導の手立てを提案する上で、学習者が be to 不定詞を用いられた英文を解釈する際に、その手助けとなる役割を果たすもので、以下のように表す。

(10) 基本的意味「取り決め」+意味誘導条件 $\alpha \Rightarrow$ 「取り決め・手筈」「一方的な取り決め」「運命」「不可能」「必要条件」

この公式は基本的意味の取り決めに、意味誘導条件が加わることにより、各意味へと派生することを表している。この意味誘導公式を用いることにより、be to 不定詞の全ての意味を基本的意味である取り決めで説明することが可能になり、またコンテキストに依存するという従来の指導の手立てとは異なり、意味誘導条件が具体的な判断材料となり学習者の英文解釈の手助けになることが見込める。

意味誘導条件の詳細は後述することとし、次項ではまず、筆者が be to 不定詞の基本的意味を取り決めとした理由を、be to 不定詞の構造的意味、独自性から述べる。

(1) be to 不定詞の構造的意味

筆者が be to 不定詞の基本的意味を取り決めにした理由を示すために、まずは be to 不定詞の構造的意味を探る。

be 動詞と to 不定詞によって構成されていることから、be to 不定詞は「to 不定詞の状態である。」と考えることができる。この to 不定詞がどのような内容を示すものなのかは多くの先行研究で言及されているが、内田 et al (2011) では、to 不定詞と動名詞を、それぞれを目的語にとる動詞に着目しその差異を説明している。

内田 et al (2011) は、始めに不定詞は「未来の事柄」を表し、動名詞は「過去の事柄、その時点での事実、一般的事項」を表すという区別を示した上で、(内田 et al 2011:122) 以下の例を持ち出して説明している。

(11a) He has decided to go to college.

(11b) I didn't intend to hurt Mary.

(12a) John stopped talking when they came up to him.

(12b) The book tells you how to avoid getting ill while traveling.

(内田 et al 2011:122-123)

(11a)(11b)の一般動詞 *decide, intend* は共に不定詞を目的語としてとる動詞であるが、「これから～することに決める」「意図する」という未来の事柄を表すので不定詞に従える。一方で(12a)の *stop* は、その時点で行われていること(事実)を中止することを表し、(12b)の *avoid* は一般的事柄を避けるという意味なので、両者は動名詞を目的語に従えると述べられている。(ibid:122-123)

以上、内田 et al (2011) から、動名詞と to 不定詞の比較により、to 不定詞は未来の内容を表すことがわかった。しかし、to 不定詞が未来の内容を表すという事だけでは、be to

不定詞の基本的意味を取り決めとした理由には不十分である。ここでもう一つの先行研究で扱われている to 不定詞の要素を加えたい。

友繁（2002）では、動名詞と to 不定詞との比較を行った上で、to 不定詞には「仮想性、未来指向性」を表し、動名詞は「現実性」を表すと主張した上で（友繁 2002:133）、to 不定詞に用いられている前置詞の to は「方向」を表し、ある方向に進んでいけば最終的にはどこかに辿りつく「到達」の意味を表すようになる（ibid:133）と主張している。この「到達」という要素が、be to 不定詞と他の未来表現とを分かつ 1 つの要素であると考えられる。

以上二つの先行研究を通じ、まず to 不定詞の表す内容を下記の 2 点とした。

to 不定詞の表すもの

(13a) 内田（2011）より、未来の事柄＝未実現の事柄

(13b) 友繁（2002）より、いずれ確実に到達するという「確実性」

そして、be to 不定詞は構造上（13）で示した to 不定詞に be 動詞が先行したものなので、be to 不定詞の基本的意味は下記の（14）とした。

(14) be to 不定詞の基本的意味

まだ未実現であるが、いずれ確実に到達する状態

⇒取り決められた状態

次項より、この be to 不定詞の表す基本的意味取り決めが、他の未来表現とどのように異なるのか、その独自性について明らかにする。

(2) be to 不定詞の独自性

be to 不定詞は、be 動詞の時制に応じて現在形と過去形が存在するが、この be to 不定詞が時間軸上のどの点を表しているのか、一般過去、助動詞 will を用いた単純未来、意志未来、be going to を用いた近接未来、また未来完了形と比較した上で、この be to 不定詞が、他のどの表現とも異なる時間軸上の点を表すことを明らかにする。

① be to 不定詞の現在形が表す時間軸上の点

以下の例文をもとに、be to 不定詞が現在形で用いられた場合に表される時間軸上の点を示す。

(15) We're to be married in June.

(安藤 2005:107)

③ be to 不定詞と他の表現との比較

以上図 1、図 2 において、be to 不定詞が時間軸上でどの点を含意するのかを示した。続く項で、他の表現と be to 不定詞との差異を明らかにする。

ア:助動詞 will を用いた「単純未来」「意志未来」との比較

(14) で掲げたように、be to 不定詞の基本的意味は「取り決められた状態」であり、未実現の内容を表す、と本論は主張する。未だ実現していない内容を表す表現として、ここでは助動詞 will を用いた表現との比較を行う。

(17a) I will start tomorrow. (萩野 2004:87)

(17b) I am to start tomorrow. (ibid)

(17a) は助動詞 will を用いた例文である。助動詞 will は大別すると単純未来「～だろう」と意志未来「～するつもりだ」の 2 つとなるが、いずれも「現在における意志、推量」に過ぎない。(17b) は (17a) を be to 不定詞に書き換えたものである。(17b) の be to 不定詞を用いた例文と比較して明らかになる両者の差異は「確実性」である。「出発するだろう」という推量の域を抜け出せない (17a) に対し、(17b) は「出発することになっている」というように、確実性という面で (17a) を上回っている。萩野 (2004) では、<will+動詞の原形>を「計画がなく、突然思いついたことにも用いる」(ibid) と説明し、<be 動詞+to>は「公式的な計画・法令などで定められた場合によく用いる。」(ibid) としていることから、未来における行為ないしイベントが発生する確実性は、(17b) が上回ると考える。

イ:be going to との比較

前項と同様に未来を表す表現に be going to の表現が挙げられる。近接未来を表すこの表現は、「確実性」という観点では be to 不定詞と大差が無いように思えるが、時間軸上で示す点が両者で大きく異なる。

(18) I'm going to start tomorrow. (ibid)

(17b) は be to 不定詞の現在形を用いた例文であり、この文が時間軸上で表す点は、図 1 と同様、現在における主語の状態 (A) と、未来の一時点においてイベントが発生する点 (B) の二点である。

一方で Quirk et al (1985) によれば、be going to の表す意味は”FUTURE FULLFILLMENT OF PRESENT INTENTION”と”FUTURE RESULT OF PRESENT

CAUSE”の二つである (Quirk et al 1985:214)。共に「現在の意図」「現在ある原因」が起因している。従って、(17b) で表される 2 点とは異なり、現在と未来における点が密接に関わっていることが差異として挙げられる。

be to 不定詞と be going to との差異は、前者が時間軸上の 2 点を表すのに対し、後者は現在と未来のある点を、いわば完了形のように帯状に繋げている点にあると解釈することができる。

ウ：未来完了形との比較

未来を表す表現との比較の最後に、未来完了形を取り上げる。

(19) I will have started by tomorrow. (ibid 改)

前項と同様に、この未来完了形と be to 不定詞との意味上の差異は時間軸上で表される点にある。(19) は完了形であるという点から、現在と未来の一時点を密接に結びつけている。加えて 3. (2) .③.アで挙げた助動詞の will が用いられていることにより、「現在における意志、推量」という意味が現れ、「確実性」という点においても、be to 不定詞に劣ることが言える。

エ：単純過去との比較

be to 不定詞の独自性を示すための比較の最後に、be to 不定詞の過去形と、単純過去形との比較を行う。

(20) He did not see her even as a shadow. (Google)

単純過去形は、過去起きた出来事、状態、習慣的行為を表し、時間軸上では過去のある一時点における一点を表す。これに対し be to 不定詞の過去形は、図 2 で示したように、過去の一時点で達成されなかった点と、発話時から過去へ向けた視点が加わり 3 点が含意されることから、単純過去が表す時間軸上の点とその数が大きく異なる。

以上助動詞 will, be going to, 未来完了形、単純過去形と be to 不定詞との比較を行い、be to 不定詞が他の表現どのように意味が異なるのかを示した。be to 不定詞の基本的意味の「取り決められた状態」とは、時間軸上に表す点、確実性という点から他の表現と意味的な差異を有する。

(3) be to 不定詞の意味誘導条件

(10) において be to 不定詞の意味誘導公式を挙げたが、これは学習者が be to 不定詞

の意味を解釈する際に、文脈に依存するだけでなく、具体的な情報をもとに英文を解釈することができるように筆者が考案したものである。基本的意味の取り決めに具体的な意味誘導条件が加わることで各意味に解釈されることを表す。

この意味誘導条件を導き出すために、筆者は Langacker (1987) におけるボトムアップ処理に基づき、具体的な言語使用例をもとに、一般的規則を導き出そうと試みた。COCA (Corpus of Contemporary American English) および BNC (British National Corpus) を用いて、be to 不定詞の各用法例を集め、それぞれの用法に見られる特徴を抽出した。ここでは各意味誘導条件の発生率に留め、のちの 3. (4) にてそれらの検証をする。以下はその結果である。

表1 be to 不定詞の意味誘導条件

「取り決め」+意味誘導条件	
一方的 取り決め 89例	+社会のルール(65%) + 話者による取り決め(94%) + Sがyou(82%)
運命 243例	+Sが人(100%) + 過去形(99%) +否定(92%)
不可能 155例	+過去形(99%) + 否定(92%) +受動態(95%) + Sが無生物(84%) +知覚動詞(87%)
必要条件 94例	+If節(94%) + 話者による取り決め(100%) +must, should, 命令形(94%) +Sがyou(67%)

安藤 (2005) による分類のもと各コーパスで調べた結果、各用法に表れる意味誘導条件が明らかになった。

①意味誘導条件<一方的な取り決め>

一方的な取り決めの意味として解釈される例文 89 例の中でも、主語が 2 人称の you になるものが全体の 82%にも上った。また一方的な取り決めを行ったのが文脈から話者であると判断されるものは 94%に当たる。

以上の特徴の出現率より「一方的な取り決め」の意味誘導条件を (21) とする。

(21) be to 不定詞の意味誘導条件 (一方的な取り決め)

話者による取り決め+主語が 2 人称

ここでの「主語が 2 人称」という意味誘導条件の妥当性を示すべく、(1b) の 2 人称主語を、3 人称主語に変換した文 (1b') を考察する。

(1b) 「義務・命令」 You are to show your student card at the entrance.

(入り口で学生証を見せなければなりません。)

(奥 et al 2009:192)

(1b') He is to show his student card at the entrance.

(彼は入り口で学生証を見せることになっている。)

(ibid 改)

2 人称主語という意味誘導条件を有する (1b) に対し、(1b') は特定の意味誘導条件を有していない。従ってこの (1b') に筆者の提案する (10) の意味誘導公式を適応すると、後述の 4 (3) ④における基本的意味の取り決めとして解釈される。

②意味誘導条件<運命><不可能>

運命及び不可能の意味に解釈される例文は、be to 不定詞を用いた例文の中でも多数を占めた。そこから導き出された両者の特徴は、共に過去形及び否定形という点が一致している。しかし、大きく異なる点としては、運命の意味になる場合、主語は例外なく人間が主語であること。不可能になる場合は、95%が受動態であり、知覚動詞を用いた例が 87%、加えて無生物主語である場合が 84%に上った。

(22a) She was never to hear any sound again.

(22a) は運命の意味に解釈される例文で、「彼女はいかなる音も再び聞くことはない運命であった。」といった訳が可能である。主語が人間で過去形、加えて否定形という筆者が導き出した運命の意味誘導条件を当てはめた例文である。試しにこの文に、無生物主語、受動態という不可能の意味誘導条件を適応し書き換えを行うと以下のようなになる。

(22b) Not a sound was to be heard.

(22b) は「物音ひとつ聞こえなかった。」という訳になり、不可能の意味へと変換される。

このように運命と不可能の意味において、共に過去形、否定形という意味誘導条件があるものの、主語の種類と、受動態か否かで両者の意味は区別が付く。両者の意味誘導条件を以下のようにまとめる。

(23) be to 不定詞の意味誘導条件<運命>

過去形＋否定＋主語が人

(24) be to 不定詞の意味誘導条件<不可能>

過去形＋否定＋受動態＋知覚動詞＋無生物主語

③意味誘導条件<必要条件>

続けて be to 不定詞が安藤（2005）における必要条件の意味になる際の意味誘導条件を示す。ここでの意味誘導条件には、「If 節内」という非常に限定的な条件があるため、学習者が英文を解釈する上では非常に理解しやすい条件となる。

(25) If you are to succeed, you must study hard.

(25) は必要条件の意味になる典型的な例文である。If 節という限定的な条件に加え、話者が取り決めをしているという点、またしばしば目標を表すことから、主節に **must**, **should**, **have to** といった法助動詞や、命令形が用いられることが多い。以上の点から、必要条件の意味に解釈される際の意味誘導条件を (26) とする。

(26) be to 不定詞の意味誘導条件

if 節＋話者による取り決め

④基本的意味取り決め

最後に、表 1 で示した意味誘導条件の全てが当てはまらない場合は、基本的意味の取り決めになることがわかった。(13b) で挙げた「確実性」という意味を含む点から、公的な予定を表す例が多いことがわかった。

(4) be to 不定詞の意味誘導公式の検証

前項までで掲げた意味誘導条件をもとに、(10) で示した意味誘導公式の妥当性を検証する。

(27a) I am to bring that book.

(27a) は筆者の定めた意味誘導条件が該当しない文である。この状態では基本的意味の取り決めとしての容認度が高いというのが筆者の見解である。

続けて (27a) に (21) の、一方的な取り決めになる際の意味誘導条件を適応すると (27c) となる。

(27b) (27a) + (21) 話者による取り決め＋主語が 2 人称

You are to bring that book right now.

「今すぐにあの本を持ってきなさい。」

主語 2 人称主語という条件に加え、“right now”という話者による取り決めが加わることにより、(27a) は安藤 (2005) における一方的な取り決めとして解釈される。

同様に (27a) に、(23) の運命の意味誘導条件を適応する。

(27c) (27a) + (23) 過去形＋否定＋主語が人

I was never to bring that book.

「私は二度とあの本を持ってくることはなかった。」

過去形＋否定＋主語が人という条件から、(27c) は運命の意味として解釈可能になる。また 4 (3) ②においても検証が行われたが、同じ過去形＋否定であっても、(24) で挙げた不可能の意味誘導条件を (27a) に適応すると、

(27d) (27a) + (24) 過去形＋否定＋受動態＋知覚動詞＋無生物主語

That book was not to be seen.

「あの本は見当たらなかった。」

となり、受動態＋知覚動詞が加わることで不可能の意味に解釈されることがわかる。

最後に (26) の必要条件の意味誘導条件を (27a) に適応する。

(27e) (27a) + (26) if 節＋話者による取り決め

If you are to bring that book, you must study before the lesson.

「もしあの本を持ってくるのであれば、授業の前に勉強しておかなければならない。」

If 節という限定的な条件により、(27e) は容易に必要条件として解釈が可能となる。

基本的意味の取り決めに、各意味誘導条件が加わることで、それぞれの意味に派生することが以上の検証で明らかになった。

4.be to 不定詞の意味誘導条件に基づいた指導の手立ての教育的効果³⁾

be to 不定詞は用法を列挙し、文脈によってその訳出の判断を学習者に委ねるのが従来の学校教育の場における指導の手立てであった。そこで筆者は、前章で提示した、be to 不定詞の意味誘導条件に基づいた指導の手立てを用いることにより、従来の指導の手立てよりも高い教育的効果を生むことを証明すべく検証を行った。

検証実験の方法は以下のとおりである。

(28) 検証実験の方法

- ①信州大学1年生により構成される同程度の学力を有する2つの母集団を用意する。
- ②2つの母集団を母集団A、母集団Bとし、前者の母集団Aには安藤(2005)で提示されている5つの用例を中心に解説し、後者の母集団Bには、基本的意味の取り決めと、意味誘導条件を中心にした解説を行う。
- ③解説の前後にそれぞれテストを行い、両者の解答時間及び平均点を算出した。なお、教育上の倫理観の配慮から、母集団Aには全ての実験後に、母集団Bに施した意味誘導条件を中心に据えた解説を行った。

解説の前後に行ったテスト及び取り決め、意味誘導条件をもとに行った解説の資料は後述の資料に記載する。

(28)の方法に基づき調査をした結果が以下の表2である。

表2 検証実験結果

	母集団A	母集団B
解答時間(解説前)	4分31秒	4分48秒
解答時間(解説後)	3分25秒	3分42秒
差	-1分6秒	-1分6秒
	母集団A	母集団B
平均点(解説前)	5.9点	5.8点
平均点(解説後)	5.8点	↑7.7点
差	-0.1点	+1.9点

表 2 をみると、解答時間における有効な差こそ見られなかったものの、10 点満点のテストにおいて、その平均点は、be to 不定詞の基本的意味である取り決めと、意味誘導条件を中心に解説を行った母集団 B では、+1.9 点上がるという有効な数値が算出された。以上の実験結果より、筆者の提案する意味誘導条件に基づく指導の手立てが、従来の用例中心の指導の手立てを上回る教育的効果を持つことが期待できる。

おわりに

本論文では以下の 4 点のことがわかった。

- ① be to 不定詞の基本的意味は「取り決められた状態」である。
- ② be to 不定詞は現在形と過去形によって、それぞれ含意する時間軸上の点が異なる。またそれらは他の表現の表す時間軸上の範囲と一致しない。
- ③ 安藤（2005）における be to 不定詞の各意味を取り決めで説明。（意味誘導公式）
 - ・ [A] 取り決め：be to 不定詞の基本的意味
 - ・ [B] 一方的な取り決め：取り決め＋話者による取り決め・2 人称主語
 - ・ [C] 運命：取り決め＋過去形・否定・主語が人
 - ・ [D] 不可能：取り決め＋過去形・否定・受動態・知覚動詞・無生物主語
 - ・ [E] 必要条件：取り決め＋if 節・話者による取り決め
- ④ be to 不定詞の基本的意味を取り決めとし、意味誘導条件を用いて解説することにより、学習者の理解度の向上が期待できる。

【引用参考文献】

- Quirk, R. *et al.* (1985). *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman
- 安藤貞雄（2005）『現代英文法講義』東京：開拓社
- 内田恵・桑原陽一・新妻明子（2011）『ちょっとトクする英文法』静岡：静岡学術出版
- 塙タカユキ・川崎芳人・久保田廣美・高田有現・高橋克美・土屋満明・Guy fisher・山田光・鈴木希明（2009）『総合英語 Forest 6th edition』東京：桐原書店
- 杉山忠一（1998）『英文法詳解』東京：学研
- 友繁義典（2002）「動名詞と不定詞の意味論」『姫路工業大学環境人間学部研究報告』第 4 号, 133-147 頁
- 萩野敏（2004）『INSPIRE 総合英語』東京：文英堂
- 橋本雅文（2006）「To 不定詞が意味するもの」『京都教育大学附属高校研究紀要』第 79 号, 58-67 頁

資料 1 検証実験に用いたテスト

問題 1 (解説前)

(1) 「会議は明日開かれそうですね。」

The meeting () tomorrow.

a. will be held b. is to be held c. is going to be held d. will have been held

(2) 「予定を開けておきなさい。会議は来月開かれることに決定されています。」

The meeting () next month.

a. will be held b. is to be held c. is going to be held d. will have been held

(3) 「先ほどの会議で決まりました。次の会議は二週間後に開かれるでしょう。」

The meeting () in next two weeks.

a. will be held b. is to be held c. is going to be held d. will have been held

(4) 「明後日で会議は3日続いたことになる。」

Day after tomorrow the meeting () for three days.

a. will be held b. is to be held c. is going to be held d. will have been held

(5) 「原稿の進み具合から考えて、私たちは6月に結婚することになるでしょう。」

We () married in June.

a. are to be b. will be c. are going to be d. will have been

(6) 「私たち6月に結婚しようと思います。」

We () married in June.

a. are to be b. will be c. are going to be d. will have been

(7) 「結婚式場の都合で私たち6月に結婚することに決まりました。」

We () married in June.

a. are to be b. will be c. are going to be d. will have been

(8) 「6月までには私たちは結婚しているでしょう。」

We () married by June.

a. are to be b. will be c. are going to be d. will have been

(9) 「彼女は二度と彼に会えなかったのよ。」

She () him again.

a. was never to meet b. didn't meet c. was not meeting d. couldn't to meet

(10) 「私はあなたにひどいことを言ったのを後悔しているわ。」

I () you such a terrible thing.

a. am regretting to tell b. regret to tell c. regret telling d. am to regret to

tell

問題 2 (解説後)

(1) 「さっき 15 時仙台発の電車にのったから彼女は今夜東京に到着するでしょう。」

She () at Tokyo tonight.

- a. will arrive b. is to arrive c. is going to arrive d. will have been arrived

(2) 「今夜彼女は東京に到着するだろう。」

She () at Tokyo tonight.

- a. will arrive b. is to arrive c. is going to arrive d. will have been arrived

(3) 「電車を三つほど乗り継いで行けば今夜までには彼女は東京に着くでしょう。」

She () at Tokyo by tonight.

- a. will arrive b. is to arrive c. is going to arrive d. will have been arrived

(4) 「彼女は今夜東京の着く手はずになっております。」

She () at Tokyo tonight.

- a. will arrive b. is to arrive c. is going to arrive d. will have been arrived

(5) 「我々は 8 月に 10% の賃金アップを獲得できることになっている。」

We () a 10 percent wage rise in August.

- a. are to get b. will get c. are going to get d. will have been got

(6) 「日々の努力のおかげで、我々は 8 月に 10% の賃金アップを獲得できるだろう。」

We () a 10 percent wage rise in August.

- a. are to get b. will get c. are going to get d. will have been got

(7) 「我々は 10% の賃金アップを 8 月までには獲得できているでしょう。」

We () a 10 percent wage rise by August.

- a. are to get b. will get c. are going to get d. will have been got

(8) 「我々は 8 月に 10% の賃金アップを獲得できるのではないか。」

We () a 10 percent wage rise in August.

- a. are to get b. will get c. are going to get d. will have been got

(9) 「この部屋では音が何も聞こえなかった。」

No sounds () in this room.

- a. could not hear b. were to be heard c. had been heard d. didn't hear

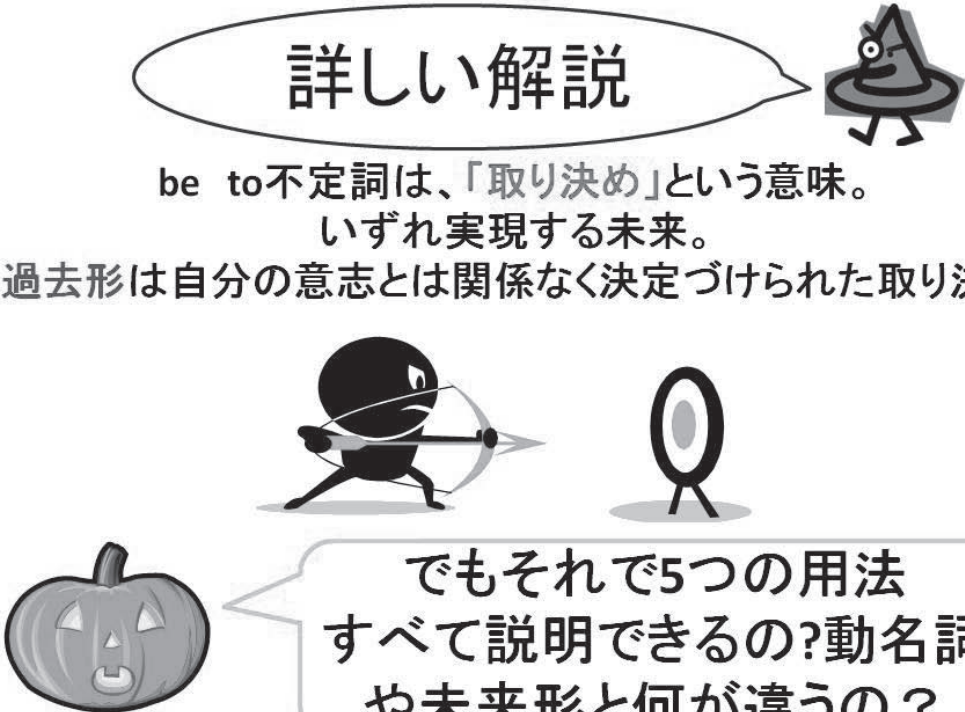
(10) 「私はその事件を見るために立ち止まった。」

I stopped () the incident.

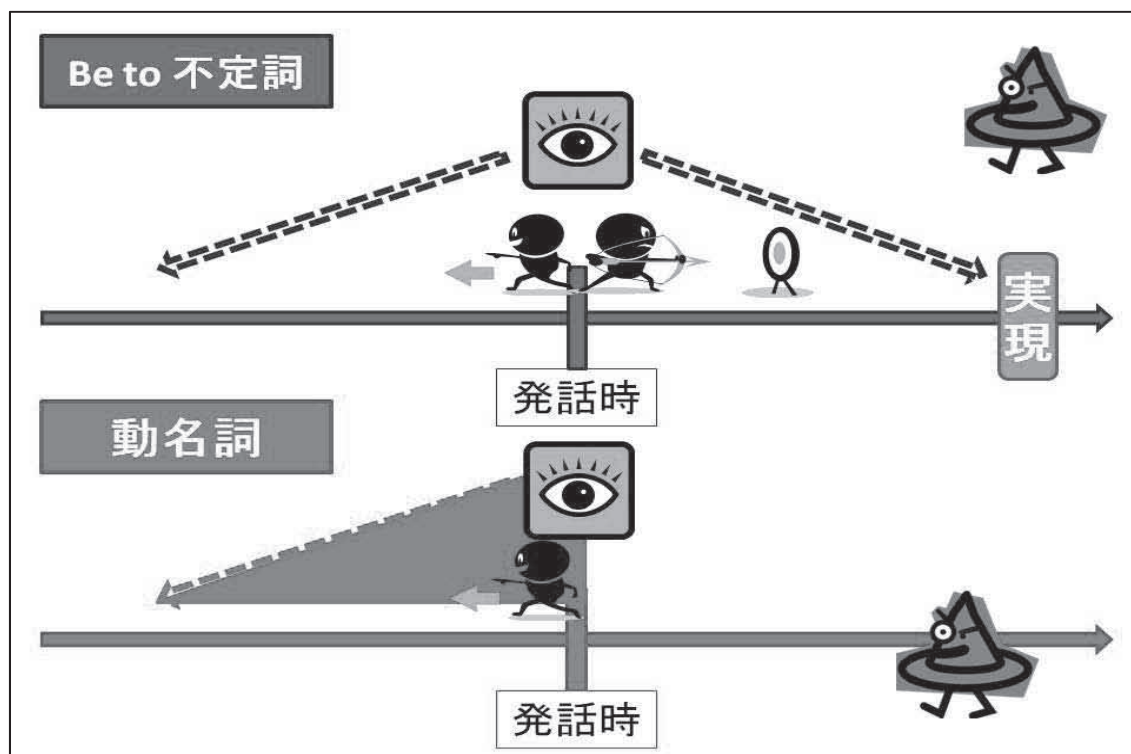
- a. to see b. seeing c. to be seen d. being seen

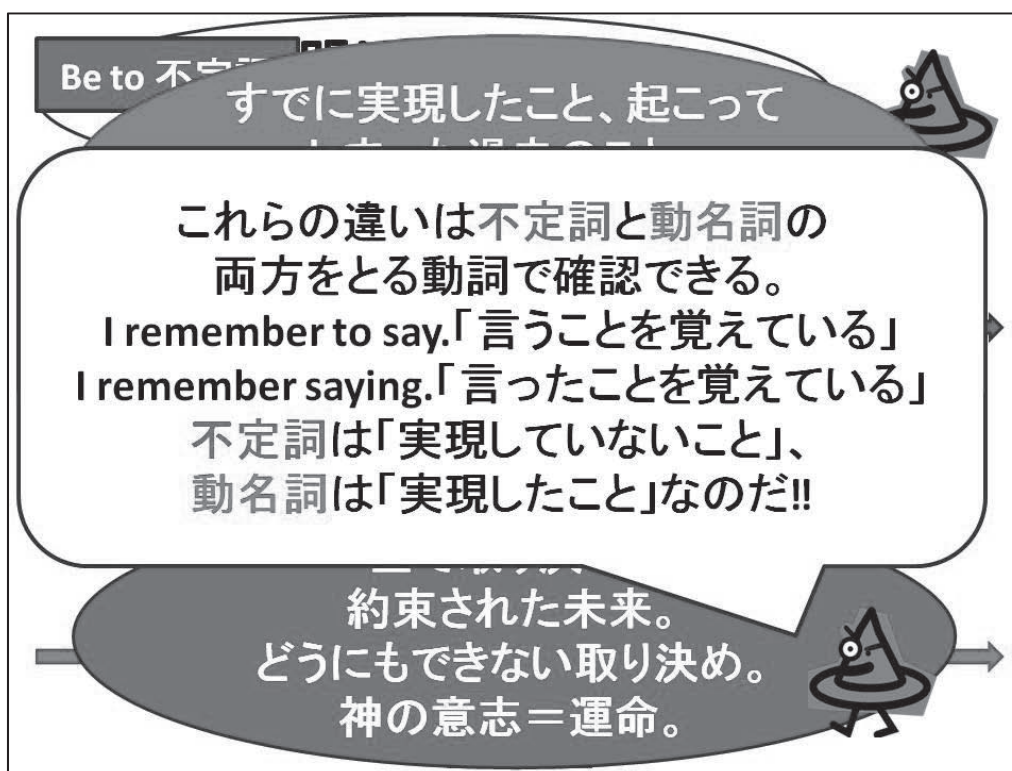
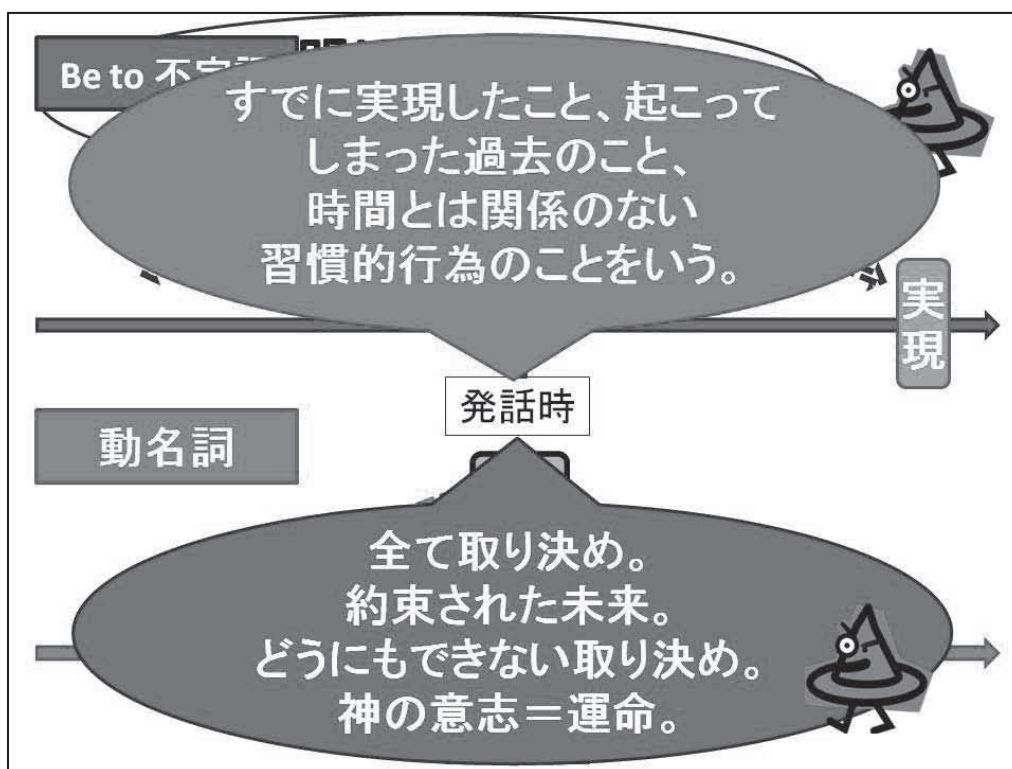
詳しい解説

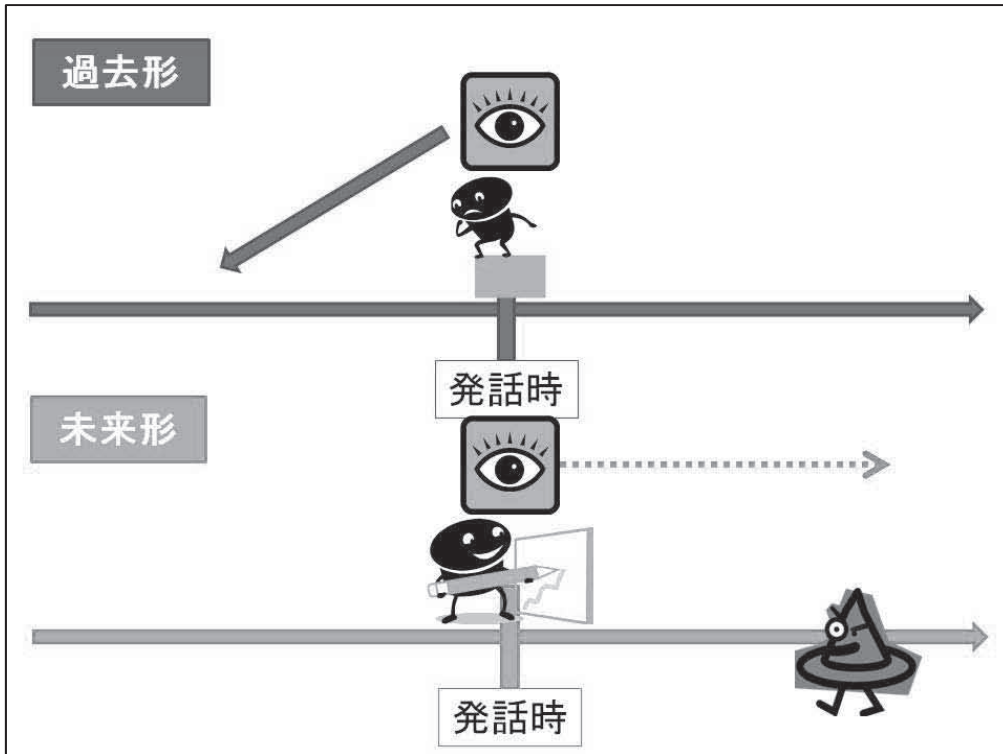
be to不定詞は、「取り決め」という意味。
いずれ実現する未来。
過去形は自分の意志とは関係なく決定づけられた取り決め。



でもそれで5つの用法
すべて説明できるの?動名詞
や未来形と何が違うの?







「未来形」には2つのタイプ・
 「単純未来(～だろう)」「意志未来(～するつもり)」
 そのどちらも、現在の意志と推測。
 対してBe to不定詞は「実現する」ことが決まっている。
 すでに定められた「取り決め」なのだ。
 The meeting will be held at six.
 The meeting is to be held at six.

未来形

発話時

過去形は過去に起こった出来事、
 状態、習慣的行為を表す。
 対してBe to不定詞は「どうしようもなかったこと」を
 発話時から見ている。
 He did not see her.
 He was never to see her again.

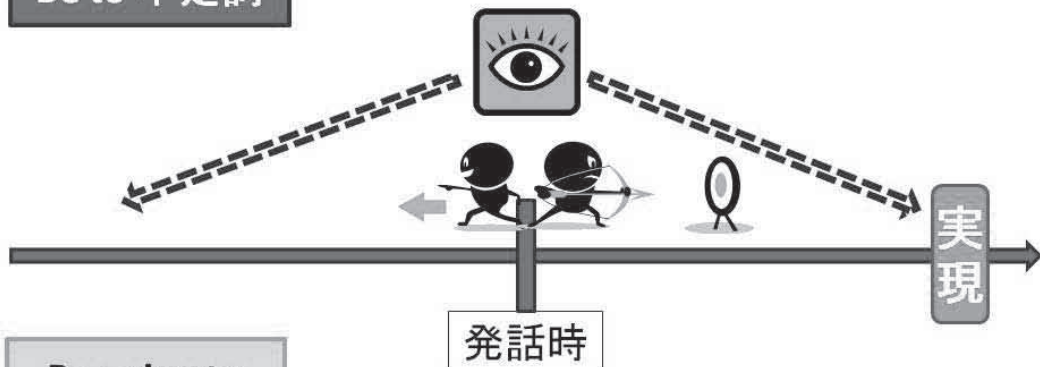
「未来形」には2つのタイプ・

過去形は昔起こったこと。
未来形は現在の予測と意志。
Be to不定詞は「どうしようもなかったこと」、
そして「実現されること」を発話時から見ている。
だからこれらの違いが生まれるよ!!

対してBe to不定詞は「どうしようもなかったこと」、
そして「実現されること」を発話時から見ている。
He did not see her.
He was never 発話時 her again.

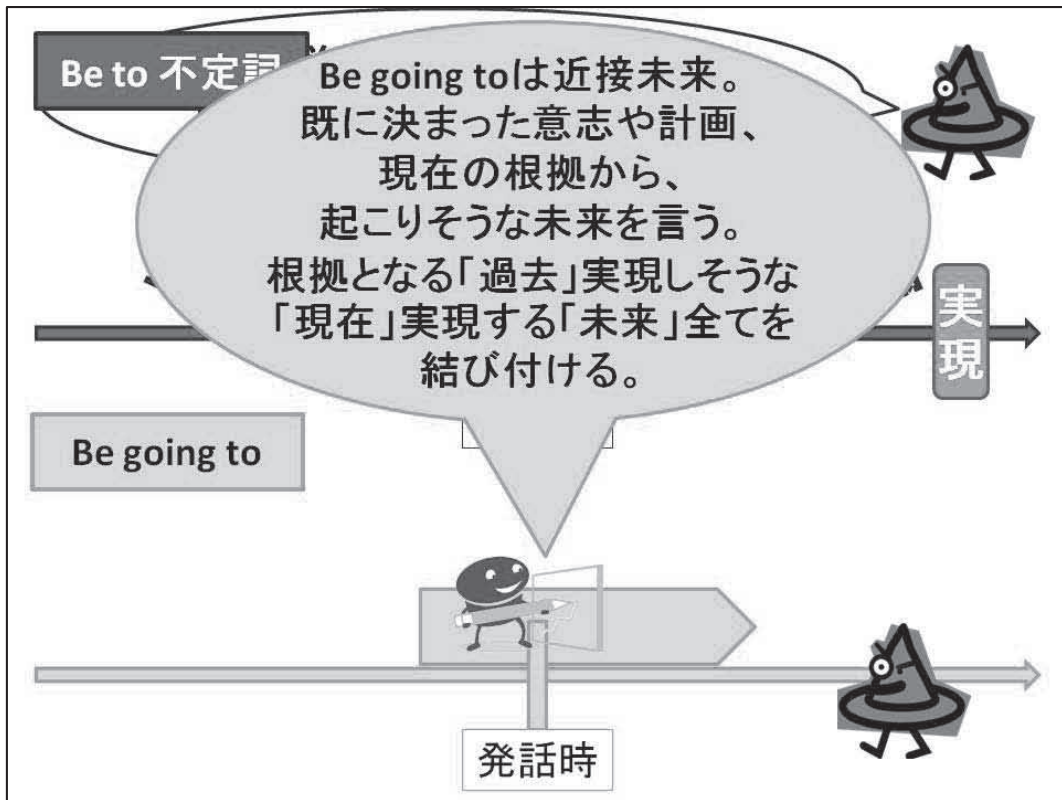


Be to 不定詞



Be going to





用法を一つずつ
説明しましょう！



運命 He was never to see her again



どちらも
過去形＋
否定形



可能 Not a cloud was to be seen in the air.

- ・運命は主語が人。可能は主語が無生物
- ・可能は受け身で知覚動詞を使うことが多い!!

用法を一つずつ
説明しましょう！



運命 He was never to see her again

どちらも過去形＋否定形多し。
自分の意志とは関係なく
一方的に定められた「取り決め」。

可能 Not a cloud was to be seen in the air.

- ・運命は主語が人。可能は主語が無生物
- ・可能は受け身で知覚動詞を使うことが多い!!

意図 If you are to succeed, you must study hard.



- ・if節内のみにも現れる。
- ・話者が「取り決め」の内容を決めている。
- ・目標を表すことがあるため、mustおよび命令形が使われる。
- ・面と向かって伝えることが多いため、主語にyouが多い。



ふむふむ。ところで、
I am to meet him in his office.
これって予定？
それとも義務？使い分けは？

義務 You are to take off your shoes right now.



- ・話者が「取り決め」の内容を決めている。
- ・話者が社会のルールを伝えている。
- ・面と向かって伝えることが多いため、主語にyouが多い。

予定 You are to take off your shoes next week.



- ・他の用法の条件が当てはまらない時にこの用法となる。
基本的には取り決め。
- ・取り決められていることという点から、公的なものが多い。
- ・時の副詞句を用いると予定になりやすい。

Be to 不定詞は「取り決め」だ!!

	条件1	条件2	条件3	補足1	補足2
予定				時の副詞句	公的なこと
運命	過去形	否定形	主語が人		
可能	過去形	否定形	主語が無生物	知覚動詞	受動態
義務	社会のルール	話者が未実現を決定		主語に you	
意図	If節内	話者が未実現を決定	Mustや命令形と共起	主語に you	

Be to不定詞は「取り決め」

・動名詞は「実現したこと」

Be to不定詞とは違ってすでに行われていること、そこから予測される習慣的行為をさす。

・Be going toは「過去」「現在」「近い未来」

を時間の幅で結び付ける。Be to不定詞は二つの点!

・未来完了は「現在の状態・行為」の未来のある一点までの継続するという予測。

Be to不定詞と違って、時間に幅がある。

・未来形は「現在の予測・意志」

Be to不定詞と違って、実現される確実性がない。

・過去形は起きたこと、起きなかったことをすべて含めて、「過去のこと」。現在とは切り離して考える。

Be to不定詞の過去形は「実現できなかったこと」。

【註】

- 1) 不定詞の用法識別を問う問題の誤答が多く見られ、英文和訳の問題でも誤訳（他の用法に当たる日本語訳をしてしまう）が見られる。
- 2) 参考文献における安藤（2005）, 奥 et al（2009）, 杉山（1998）, 萩野（2004）, Quirk et al（1985）
- 3) この調査は信州大学人文学部文化情報論講座菊池聡准教授の助言に基づく。